

研究資料

「童子口傳書つき山水并野形圖」考補遺

江 上 綏

筆者は先に本誌二三八号、二三九号において、『童子口傳書つき山水并野形圖』の成立とその性格」と題して、太田晶二郎東京大学教授、滋賀県明德院無動寺蔵ならびに京都大学農学部図書室に写本の蔵せられる未紹介の室町時代作庭秘伝書について論じ、更にそれら三本と尊経閣所蔵の「山水并野形圖」との校合を本誌二四七号及び二五〇号において行ったのであるが、それらの脱稿後、日本大学図書館にも前記三本と同様の書の架蔵せられていることを知り得たので、これについて若干の補考を加えたい。

まず、日大本の概要から述べると、現在は卷子仕立てとなっており、題簽に「山水并野形圖 一幅」と後の筆で記す。しかし、これは元来袋綴じであったのを卷子に仕立てなおしたものであることが本文の用紙の状況から明らかである。現在の巻子の表紙に用いられている青色で刷った花唐草の文様紙および見返し、雲母刷の同様の文様紙の保存状態などから察すると、この書の改装はかなり早くに行われたものようである。紙数は墨付き三〇紙、前後に白紙各一紙（長さ不同）が継がれている。紙の上下の幅は三〇センチである。紙の横の長さは元の冊子の墨付き第二四丁表に当たるところが一丁片面の長さとしては現在の状態では最も長く、二三・四センチであって、元の冊子の大体の大きさが察せられる。奥書はなく、見返しと本紙の境、ならびに、墨付きの最後の紙と最後の白紙との境に、「岡田眞之藏書」の朱印を捺す。即ち、卷子仕立てにされた後の蔵書印である。

「童子口傳書つき山水并野形圖」考補遺

次にその内容であるが、前記三本と全く同様のもので、結論を先に述べると、日大本は無動寺本、京大本の系統に属するものであるが、書写年代はこれら二本より古く、むしろ、書風は太田本にほぼ近い江戸初期のものかと思われる。本文は全般的に無動寺本、京大本に近いが、無動寺本、京大本の本文と異り、却って前田本、太田本と同じ個所が若干散見するのは、これらの個所が古い形を残していることを示すものである。一方、前田本、無動寺本、京大本、太田本が一致し、日大本のみが異なる個所がごく少数存し、無動寺、京大本と同

系統ではあるが、

それらの祖本ではないことを示している。無動寺本、京大本より古い形を残している個所の若干あるこの一本をこの度の校刊に逸したことは残念であるが、このような異文のある個所は先にも述べた如く数多くはなく、むしろ、無動寺と京大の両本が、両本の江戸初期ごろ又はそれより古い祖本の形をかなり忠実に伝えている。

「童子口傳書つき山水并野形圖」（墨付第三紙） 日本大学蔵

ることが、日大本を検することによって知られるに至ったのである。

文中の絵の岩や木などの形は、すでに無動寺、京大両本に非常に近いものになっているが、隈取りを施す点では前田本、太田本と共通していることは興味深い。

「童子口傳書つき山水井野形圖」の校刊に際し、閲読、公刊を許された諸本の所蔵者、管理者の方々に改めて感謝の意を表すると共に、種々御教示下さった先学の方々にも末筆ながら深く謝意を表するものである。

図版要項

一 蔵王権現像（原色刷）

鳥取 三 仏 寺 蔵

木造 彩色 一一〇センチ 像高 九九センチ
総高 一一〇センチ
光背高 四四・八センチ 横はり 三八・八センチ

二 本尊蔵王権現像

同

木造 漆箔 一一五センチ 台座高 二四センチ
像高

三 胎内納入文書 その一

同

紙本墨書 天地 約二〇・五センチ 横 上辺 二八・七センチ
下辺 三〇センチ

四 同 その二

同

紙本墨書 天地 約二〇・五センチ 横 上辺 一八・五センチ
下辺 一三・三センチ

同 その三

同

紙本墨書 天地 二〇・五×二〇・九センチ 横 上辺 一一センチ
下辺 一五センチ
一―四 猪川和子「三仏寺蔵王権現像と胎内納入文書」参照

五 後三年合戦絵巻 上巻第二段（主題不明）

東京国立博物館保管

紙本着色 天地 四五・七センチ

六 同 中巻第二段（末割四郎の戦死）

同

紙本着色 天地 四五・七センチ

五・六 宮次男「後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 上」参照